

遺稿詩集
& アンソロジー

風 にそよぐ

目次

I 遺稿詩集 風にそよぐ

1 牧野は雲に近く

牧野は雲に近く	10
吉備路	12
あすか路	14
吉野の庵	16
東京'91秋を歩く I	18
東京'91秋を歩く II	20
雪 国	22
歩けば風もいる	24
笹五位	26
かいつぶり実演する	28
水辺の朝	30
田園物語	32
春一番	34
菜の花は岸辺に淡く	36
夏の名残	38
冬の花束	40

2 旅素描 I

雪 女	42
雲は憶えていた	44
バイソンの午後	46
吹上浜	50
開聞岳	51
坊ノ津は海路はるか	52
都井岬	53
霧島残照	54
肥後の赤牛	55
天草灘	56
大江天主堂	57
老岐の島に雨降る	58
国東半島	59
九州高速道雨宿り	60
巡業幟	61

3 七月の波紋

都井岬	64
日向灘	66
海の手帳	68
望郷	70
風知草	72
北アルプス中通り	74
冬の旅	76
埠頭物語	78
七月の波紋	80
水軍記	82
翔んだ	84
ランチ・タイム	86
初夏のエプロン	88
間奏曲	90
南からの来客	92
満天旅日和	94
闇という群像へ	98
タイム・カプセル	100

4 旅素描Ⅱ

セーヌ奔流する	102
トマト	104
奥津温泉	108
大原美術館	109
小豆島	110
かずら橋	111
足摺岬	112
路傍の橋	113
石舞台	114
明日香の局	115
吉野山	116
吉野葛	117
とろ峡	118
潮岬灯台	119
信濃路	120
立山連峰	121
能登の海	122

永平寺 123

5 初夏を渡る

初夏を渡る 126

異端の宿 128

秋色三昧 130

年賀状 二千年 132

詩碑帰る 134

旅一幕 136

旅を拾う 138

パンより熱く 140

ポスト 144

腕 146

公園 150

6 旅素描Ⅲ

箱根 154

東京都 155

みちのく万緑行 156

羚羊ひと恋い 157

シスコの蟹料理 158

デイズニールランド 159

ベーカーズフィールドのおもちや 160

宇宙 161

7 わが大正の勿忘草

系譜の里 164

銀の糸 168

ふりむけば愛 170

わが大正の勿忘草 172

8 随想

笹沢美明さん父子のこと 178

安西 均さんのこと 180

II アンソロジー 蒼穹のかなたから

1 第三詩集 風と寓話と

愛と海	186
季節の椅子	188
皿倉山	190
秋片	192
日の渴き	194
水にやどる	196
悪い顔	198
かもめ	200
葦の朝は	202
エメラルド・サラダ	204
こぶしの風	206
72メリー・クリスマス	208
小鹿田の里	210
なにも切ればしない	212
鐵路のすずめ	214
月蝕のイヴ	216

2

第二詩集 天使錯乱

島へ I	218
島へ II	220
晩餐会	222
砂漠と蝶	224
那須の庭	226
犬吠埼	228
土笛	230
黄の幻想	232
祈りにかえて	234
天使錯乱	240
或る変貌	242
Etude	244
夏祭	246
化粧 1	248
化粧 2	250

3 第一詩集 柊花

舞 252
 山門 254
 墓参 256
 蓮 258

土鈴 262

冬 264

街路 266

室内 268

発芽 270

児童畫 272

4 詩誌「鵬」創刊号

隨筆「出産記」吉木幸子 276

詩「とまどう」小田雅彦 278

5 幕末閨秀 原采蘋の生涯と詩
 (漢詩の現代詩風意訳)

寄遠曲／春蚕／花下飲／懷人遊彦獄／遊耶馬溪 281

／長崎書感／文政八年春乙酉正月二十三日発
 郷／春暁／贈友人／探珠楼賞紅梅／春雨即興
 ／富士山／赴房州途上／弘化五年元旦(一)／雨
 中遊神餘／勝浦沮雨／天草雜詠／除夜二首(一)
 ／颯風／謝宮内氏贈烟草／麿城
 原采蘋 略歴 304
 原采蘋関連の新聞記事(朝日新聞掲載) 305

初出・制作年一覧 309

発行に寄せて 313

早川義孝画伯「公園」受贈詩画 174

海老原喜之助画伯「秋片」 236
 (西日本新聞文芸欄掲載)

村田東作画伯「皿倉山」 238
 (西日本新聞文芸欄掲載)

吉木幸子 略歴 328

I
遺稿詩集
風にそよぐ

1 牧野は雲に近く

牧野は雲に近く

—久住高原—

太古の丘が波うつ

この緩やかな広がり

風の住まいかもしれぬ

人は　　なんであろうと

捉えることはできない

動くスロープが

すぐに隠してしまうからだ

早春の土の肌を

淡い炎がなめていく

牧草の丘となるために

焦げつづける処女地
戒律の香ただよう辺りに
人影はない

遠い日

硝煙を知ることもなく
肥沃の懐へ放された牛
うぶ声こだまする子牛らよ
あれは 湯のけむりだ

牧夫を乗せて

斑まだらの馬が翔けていく

蹄と 大地と

呼応する響きをつれて
やまなみから 雲の裾へ

吉備路

吉備津社釜鳴神事

—原采蘋・文政十一年一月三日（一八二八年）—

幾群賽客踏春行

いく群れの旅人が
春を訪ねて参詣したことであろう

感応會聞釜有声

感応して釜に声があると
かつて聞いている

吾又相隨羅排去

わたしもまた随いてならば
拝したうやまい祈って

虔祈工作迅雷鳴

迅雷のように鳴る工作をした

原采蘋はらさいひん東遊途次の詩である

そのとき釜は静かであつたか
なにごとを口ごもつていたか
敬虔なひとときが流れる

禍福をいまさらと

ひらめいてとりなし

ふと わるびれぬ戯れがあつた

—釜よ 迅雷のように鳴れ—

その工作はなされていた

旅人のわたしは

吉備津神社の長い回廊をあるき

釜を拝して立ち去つたが

まさに夜半の迅雷は

百六十年を経て吉備路を直撃した

台風一九号の怒号であつた

註：台風一九号は一九八七年十月十六日

あすか路

都会派の風吹く終日
うずくまる石たちの
ロマンが賑わう

古代のかげろうを踏み
肩に戯れるうす絹と
萩の階を雲にあるいた

古木と祠ほこりと戻り道
振り返るからす瓜の黄昏たそがれに

童女の記憶が手をのばす

十三夜めぐった月は

欠けた顔のまま

森のはずれに眠り

古都の風が

暗い庇をとおったのは

旅の寝覚めのうつつどき

山あいの霽もやで

眸ひとみを洗う蝶がいて

遠い里に一すじ立ちのぼる望郷

吉野の庵

— 西行庵にて —

地図のうえに心急いだ
雑木の径は胸突き八丁
桜の枝にいき切らせて
埋もれた草庵を呼ぶ
その人は待っているだろうか
落ち葉ふる古代の庭に

軒端から久しい行方を吹き渡り
歳月は去っていた
気配をたぐれば触れもする
その時の証しを伴れて

ひたひたと

あなたは何処にもいる

風土は多くを培つちかったので

ひとはひそかにときめき

香ばしさを仰ぐ

知るのは梢であつたかもしれぬ

住む人の不在など

風も告げはしない

老木らのたたずまいに

幽ひそやかなざわめき措おいて

恍惚をひしと

さまよえばどこまでか

誰も戻つてはこない

花をまつ花のふる里